

日本語の複合形容詞における連濁現象

谷 脇 康 子

1. はじめに

日本語の合成語を特徴づける音韻現象の1つとして、第2要素の語頭無声子音が有声化する「連濁」が挙げられる。しかし、2語が緊密に結合していれば必ず連濁を起こす、という訳でもなく、連濁については不明な点が多い。連濁の生起条件に関しては、音韻、形態、統語、意味等様々な観点から規則性がまとめられてきた。それら先行研究の多くは複合名詞のデータに基づいた分析であり、複合形容詞に絞った研究はそれほど進んでいないように思われる。日本語の複合語の中では、複合名詞が最も数が多く、生産性が高いということを考えれば、それも当然のことであろう。本稿では、従来あまり取り上げられてこなかった、複合形容詞の連濁に焦点を当て、その生起に関する要因を、先行研究と筆者独自の分析によってまとめることを試みる。まず2節において、連濁可能な音を持つ複合形容詞をもれなく列挙し、連濁の生起分布を観察する。3節では、Otsu (1980) と平野 (1974) にまとめられた連濁適用規則を紹介し、問題点を指摘する。4節はモジュール形態論の語形成において、連濁規則がどの範囲に適用されるか明らかにする。5節は連濁阻止の要因を複合形容詞に適用し、連濁生起のメカニズムの可能性を提唱する。6節は結論と今後の課題である。

2. 実 態

複合語とは、基本的には自立して現れうる2語（以上）によって形成された、より大きな語であるが、連濁は複合語、および派生語を含む合成語全般にわたって、語としてのまとまりを特徴づける音韻現象であるから、本稿では「か細い」のような接辞の付いた派生語も含めて考察する。具体的には/k/（「か行」）、/s/（「さ行」）、/t/（「た行」）、/h/（「は行」）で始まる形容詞及び接尾辞を第2要素に持ち、2つの構成素で成り立つ合成語に分析の対象を絞る。資料は、岩波書店『広辞苑』『逆引き広辞苑』、日本放送出版協会『発音アクセント辞典』、および先行研究論文から収集した。形容詞の項目の中で該当する複合形容詞をくまなく取り出し、それを第1要素（以下 C_1 ）との結びつきにおいて、第2要素（以下 C_2 ）が（A）いかなる場合も連濁を起こすもの、（B）ほとんど連濁すると見なせるもの、（C）条件によって連濁するもの、（D）ほとんど連濁しないもの、（E）連濁しないもの、という5つのグループに分類した⁽¹⁾。 C_1 と C_2 が唯一的に結びつく例は、 C_2 が連濁を起こしているかどうかで、グループ（A）もしくは（E）に分類される。

なお、現代日本語としてあまり一般的に使われていないものは除外した。

C_2	$C_1^{(2)}$
(A)	
—強い	辛抱—、気—、涙—、手—、根—、力—、心—、堪忍—、我慢— 等 生産的 (NA 型) 粘り— (VA 型)
—暗い	うす— (AA 型) 小— (PA 型) ほの— (NA 型)
—辛い	聞き—、見—、食べ—、読み—、起き— 等 生産的 (VA 型)
—軽い	気—、口—、手—、身— (NA 型)
—かゆい	齒—、むず— (NA 型)
—せわしい	気—、心— (NA 型) 小— (PA 型)
—細い	気—、心— (NA 型) か— (PA 型)
—堅い	底—、涙—、口—、手—、物—、義理— (NA 型)

- 野暮－ (NaA 型) 悪－ (AA 型)
- －太い 図－, 野－, 音 (ね)－ (NA 型) けち－ (NaA 型)
- －悲しい 物－, 心 (うら)－ (NA 型) 嬉し－ (AA 型)
- －深い 疑い－, 奥－, 欲－, 毛－, 情け－, 木 (こ)－, 草－,
根－, 慈悲－, 思慮－, 興味－, 罪－, 遠慮－, 料簡－,
用心－, 執念－, 関係－ 等 生産的 (NA 型)
- 親しみ－, 疑り－, 慎み－, なじみ－ (VA 型)
- －早い 喧嘩－, 気－, 匂－, 子－, 手－, 目－, 耳－ (NA 型)
- 手っ取り－ (VA 型) す早い (PA 型)
- －さみしい 心－, 口－ (NA 型)
- 甘酸っぱい (AA 型), 待ち遠しい (VA 型), 小賢しい (PA 型),
手強い (NA 型), すばしこい (NA 型), 目ざとい (NA 型)

(B)

- －黒い 腹－ (NA 型) うす－, 浅－ (AA 型) どす－,
*まっ－ (PA 型)
- －白い 青－, うす－ (AA 型) 生－ (NA 型) *まっ－ (PA 型)
- －汚 (穢) い 口－, 腹－ (NA 型) 小－ (PA 型) *意地－ (NA 型)
- －賢い ずる－, 悪－ (AA 型) *耳－ (NA 型)
- －遠い 人－, 間－, 耳－ (NA 型) *程－ (NA 型)
- －近い 身－, 手－, 口－, 端－ (NA 型) *人－, *程－ (NA 型)
- －高い 算盤－, 勘定－, 算用－, 人－, 名－, 物見－,
甲 (かん)－, 気 (け)－, 計算－ 等 生産的 (NA 型)
*御－ (PA 型)

(C)	連濁あり	連濁なし
－苦しい	息－, 胸－, 目間－, 心－ (NA 型)	むさ－, 堅－, 狭－, 重 －, 暑 (熱)－ (AA 型)
－怠 (たる) い	寝－, 見－ 等 生産的 (VA 型)	舌－ (NA 型)
	気 (け)－, 間－ (NA 型)	あまっ－ (AA 型)
		かっ－ (PA 型)
－はゆい	目 (ま)－ (NA 型)	面－ (NA 型)

(D)

- －臭い てれ－, こげ－ (VA 型)

古ー, とろー (AA 型)

白粉ー, まっこうー, 紙子ー, 田舎ー, 仏ー, 男ー, 仙人ー,
爺ー, 坊主ー, 水ー, 汗ー, 味噌ー, ぬかみそー, バター,
乳ー, 土ー, 分別ー, 素人ー, 人ー, 金(かな)ー, カビー,
泥ー, 小便ー, 日向ー, 血ー, 酒ー, 洒落ー, 自慢ー,
きなー, うさんー, 青ー (NA 型) * (血) 生ー (NA 型)
面倒ー, 七面倒ー, 馬鹿ー, 半可ー, 陰気ー, 心気ー, 鈍ー,
邪魔ー (NaA 型)

ー広い 口ー, 幅ー (NA 型) だだっー (PA 型) * 手ー (NA 型)

(E)

ー細かい きめー, ことー (NA 型)

ー寒い うすらー (AdvA 型) うすー (AA 型) 御ー (PA 型)
うそー, 肌⁽³⁾ー (NA 型)

ー辛い 甘ー (AA 型) 塩ー (NA 型)

ーこましい せせー (PA 型) 荒ー (AA 型)

ーたらしい 嫌みー, 自慢ー, 未練ー (NA 型) 長ー (AA 型)
惨めー (NaA 型) 好いー, 憎ー (VA 型)

ーこい 小(ち)っー, 冷っー, 丸っー, 間怠っー (AA 型)
粘っー, ねちっー, 滑っー, やにっー, 脂っー (NA 型)

ーたい 食べー, 遊びー, 聞きー, 知りー, 行きー, 寝ー 等
生産的 (VA 型)

ーさびしい うそー, 口ー, 物ー, 心(うら)ー, 心(こころ)ー (NA 型)

ーひどい 手ー (NA 型) こっー (PA 型)

ー恥かしい 気ー (NA 型) 小ー (PA 型)

末頼もしい (NA 型), 筋骨たくましい⁽⁴⁾ (NA 型),

口さがない (NA 型), 物騒がしい (NA 型),

物凄 (NA 型), 回りくどい (VA 型)

このような実態を観察すると、連濁の有無はほとんど恣意的なもののようにも思われる。しかし仮に連濁という音韻現象がまったく気まぐれの、ad hoc な現象であるとしたら、我々はその有無を、1つ1つの複合語について個別に覚えていかなければならない。あるいは新造語に対して、連濁の有無が個人によってまちまちであることも起こりうる。しかし、言語習得の過程や、母語話

者に共通する直感を考えると、そのような事態は不自然である。従って、連濁生起に関わる何らかの規則性を、見い出していくことを試みる。

3. 先行研究

本節では先行研究の中で連濁適用規則を定式化した代表例を2つ取り上げ、その問題点を指摘する。

3. 1. Otsu (1980) の連濁適用規則

Otsu (1980) は合成語の内部構造を以下のように規定した。

(1) A. 複合語

a. strict compound : $[_N \# \text{kara} (+) \text{kami} \#]$ からかみ(ふすま)

b. loose compound : $[_N \# [_N \# \text{kara} \#] [_N \# \text{gami} \#] \#]$
からがみ(中国製の紙)

c. dvandva : $[_N \# [_N \# \text{yama} \#] [_N \# \text{kawa} \#] \#]$
やまかわ(山と川)

B. 派生語

a. 接頭辞付加 : $[_N \# \text{oo} \# [_N \# \text{gata} \#] \#]$ おおがた

b. 接尾辞付加 : $[_N \# [_A \# \text{shizuke} \#] \# \text{sa} \#]$ しずけさ

“loose compound” とは、 C_1 と C_2 との結合が緩やかで、どのような語とも比較的自由に結合し、その点で生産性が高い複合語である。複合語全体の意味は個々の構成素の意味から予測可能である。アクセントはもとの構成素のアクセント型をくずして、1つにまとまる傾向にある。それに対し、“strict compound” は、特定の語との結合しか許されない生産性の低い複合語である。複合語全体の意味は個別の語彙項目として独立して覚えられなければならない。アクセントは各構成素の型を維持する傾向にある。“dvandva” は並列構造を成す複合語である。派生語は意味的に形式化した接辞を、語幹に付加して形成された語である。

Otsu によると、これらのうち連濁を起こすのは“loose compound”と接頭

辞付加の派生語であるという。連濁を起こす合成語は内部構造において、連濁可能な音の左側が「語」の境界で区切られている、という共通点を持つ。この点をふまえ、連濁適用規則を次のように定式化している。

- (2) C (onsonant) \rightarrow [+voice] / [_NX[#_Y
 where (i) X \neq null and
 (ii) Y does not contain any voiced ob-
 struents.

Otsu の提唱する strict compound と loose compound の違いを簡潔に示すと、次のようにまとめられるだろう。

(3)	strict compound	loose compound
連濁	無	有
アクセント	まとまらない	まとまる
意味の予測	不可	可能
生産性	無	有

しかし複合語全般を見渡すと、内部構造において語境界を持たない strict compound というのは非常に特殊である。上記 4 つの特性の有無によって複合語が明確に 2 分される訳ではない。例えば、「稲刈り、草刈り」と「五分刈り、虎刈り」の対立、あるいは「雨降り、雪降り」と「本降り、土砂降り」の対立を見ると、連濁、アクセントのまとまりの点では、前者は strict compound、後者は loose compound と判別される。しかし「稲刈り、草刈り」の C₁ と C₂ の関係は O+V 関係、「雨降り、雪降り」のそれは S+V 関係であるので、当然意味の予測は可能であり、ある程度生産性も認められる。その意味で、連濁現象は見られなくても loose compound と考えられる。

複合形容詞を Otsu の提唱する連濁の有無の基準で分類すると、2 節で述べた (A, B) グループは loose compound, (D, E) グループは strict compound, (C) グループは両者にまたがることになる。しかし (A, B) グループの中で C₁ と C₂ が唯一的な結びつきをし、その点で strict compound とみなされるが、連濁が起こりアクセントもまとまっているものがある。(素ばし

こい, 手ごわい, 待ち遠しい, 甘酸っぱい, 小賢しい) 逆に (D, E) グループでは, 連濁が起こっていないのに, *strict compound* とみなしにくいものが存在する。「嫌みたらしい」「未練たらしい」「憎たらしい」等「-たらしい」型, 「遊びたい, 食べたい, 行きたい」等「-たい」型は, アクセントのまとも, 生産性や意味の合成性があることから, 総合的には *loose compound* であると判断される。

最後に派生語の分析も妥当性に欠ける。接頭辞付加には連濁が起こるとされているが, 「各, 某, 前, 現, 元, 同」等の「連体詞的」接頭辞には連濁が起こらない(影山(1993))点を見落としている。PA 型複合形容詞の「御高い, 真白い, 真黒い, かったるい」には連濁が起こっていない。

以上の点で, 合成語における連濁の有無は, 内部構造の異なる, *loose compound* と *strict compound*, 及び接頭辞付加と接尾辞付加の区別に拠るものだと結論づけるのは, 短絡的に過ぎるであろう。

3.2. 平野(1974)

平野(1974)は連濁の有無は, 「内部構造において C_1 と C_2 の間に介在させる事のできる要素は何かという事をふまえ」(平野(1974: 34)) 起こる条件/起こらない条件を次のように規定した。

(4) 起こる条件: *-no, -ni, -de < -nite*

起こらない条件: *-o, -to, -te*

起こらない条件の ‘*-o*’ は C_1 と C_2 が O+V 関係にある時, ‘*-to*’ は並列関係を成す時, (5節④) ‘*-te*’ は複合動詞の場合である⁽⁵⁾。起こる条件の ‘*-no*’ は一般的な属格関係(本だな, 勉強づくえ等) ‘*-ni, -de < -nite*’ は平野が ‘Pseudo-objects’ と呼ぶ, *dative, locative, instrumental* 等の項を C_1 におく複合語である。(手がき, 手どり, のだて, 命がけ等) そして起こる条件に共通して含まれる *n* 音は, 連濁生起の起源として, そこに鼻音の存在が関与していたことを喚起させるという。

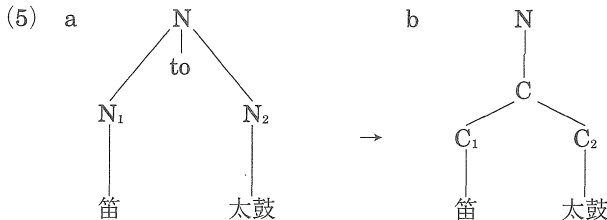
平野の分析の問題点は次のようにまとめられる。

i) 仮にこの介在する要素の存在を認めるとしても、起こらない条件に S+V 関係を表す *-ga* を付け加えるべきである。(5 節④)

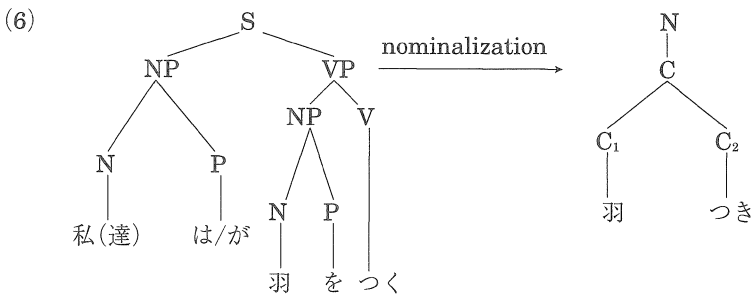
ii) VV 型複合動詞の C_1 と C_2 に *-te* を介在させているが、次節で述べる統語的複合動詞には、意味的に *-te* が介在しているとは考えられない。

iii) 起こる条件の *-no*, *-ni*, *-nite* 全てにふくまれる n 音は、「鼻音的要素の介在が連濁をひき起こしたという証明にもなるのではないか」(平野 (1974: 35)) と考察する。しかし連濁という共時的な音韻現象の説明に、通時的観点からの考察をまじえ、論拠にするのは妥当ではない。

iv) この分析では、複合語の内部に存在した格助詞的な要素が削除変形を受け、複合語が形成されたかのように扱われている。そうすると、複合語形成は全て統語部門が引き受けることになる。例えば、 C_1 と C_2 が並列構造を成す場合、平野は基底を “ C_1 to C_2 ” と設定し、接続詞 “to ‘and’” が連濁を阻止する要因となり、“*to-deletion*” がかった構造と分析する。



C_1 と C_2 が O+V 関係にある時は、次のように基底構造から名詞化変形を受けて、形成されると分析している。



格助詞の存在が連濁を阻止する要因と考えると、複合語は語よりもむしろ句としての特性を持つことになり、これは明らかに直感に反する。複合語は確かに語として認定されるものであり、平野のこの基底構造は不適切であることを、並列構造を成す複合語と、O+V 関係を成す複合語において実証する。

修飾語と複合語の関係：語の一部のみ外部から修飾することはできない。

- (7) [懐かしい [笛太鼓]] の調べ * [懐かしい [笛]] 太鼓の調べ
 [その [行き帰り]] の道のり * [その [行き]] 帰りの道のり
 [父の大好きな [魚釣り]] * [父の大好きな [魚]] 釣り

語彙照応の制約：語の内部の要素を文中の照応に利用することはできない。

- (8) * 爪_i 切りを使ったら、それ_i をきれいに片づけなさい。
 * 夜_j 昼なしに働くと、その_j 時間が家族と共にくつろげない。
 * あとさき_k 考えずに行動してはいけません。特にそちら_k の事は見通しをたてなさい。

意味の慣習化：特定の語同士の結びつきしか許さず、合成的な意味から慣習的な意味に使われる。

- (9) [尻とり／*尻つかみ] 遊び [花見／*梅見] のシーズン

分断不可：語の内部に別の要素を介在させることはできない。

- (10) *山小川, *好き魚嫌い, *行き学校帰り, *尾背ひれ

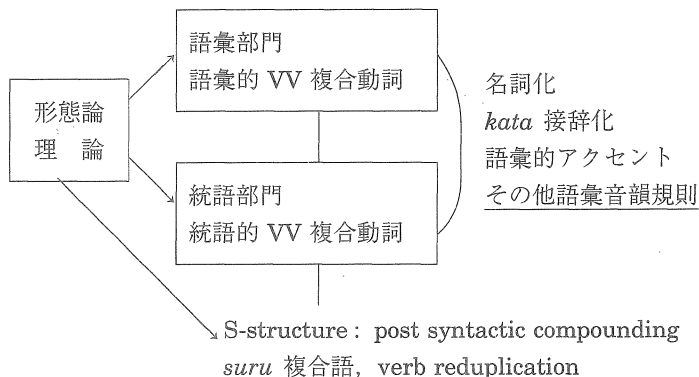
このように、通時的観点も組み込んで、連濁有無の条件に格助詞的要素を介在させ、その削除変形によって連濁が起こっていると分析する平野のこの手法は、複合語の語としてのまとまりを考慮に入れていないので不適切である。

4. 語形成と連濁

本節では連濁規則が語形成のどの部門に適用されるものであるか、モジュール形態論の枠組で考察する。影山 (to appear) のモジュール形態論のモデルによると、語形成は *lexicon*, *syntax*, *post-syntax* の3つの部門で行われる。そして語彙的複合語も統語的複合語も、音韻的には同じ振る舞いをするので、

語彙音韻規則は語彙部門，統語部門の両方にわたって適用されると考えられている。VV 型複合動詞を形成するモジュール形態論の枠組みは次のように表される。

(11)



連濁規則がこの語彙音韻規則（下線）の扱いを受け、両部門において自由に操作されるのかどうか明らかにするために、2節で列挙した複合形容詞が、語彙的複合形容詞なのか、統語的複合形容詞なのか判別していこう。問題の複合形容詞を C_1 の統語範疇によって分類すると、NA 型、PA 型、NaA 型、AA 型、VA 型複合形容詞に下位分類される。由本（1990）によると、NA 型複合形容詞はそのほとんどが語彙部門で形成される。それは、修飾語句のついた名詞が C_1 になりえないこと（＊[青々した草] 深い所）、語彙部門に属する接尾辞付加が可能なこと（欲深さ、口汚さ、遠慮深さ）、統語操作である Adj-deletion を受けないこと（＊彼女は足、彼は耳早い）等のテストで実証される。

同じテストを AA 型複合形容詞に当てはめてみよう。

(12) a. [サウナのように [暑苦しい]] 部屋

＊ [サウナのように [暑]] 苦しい部屋

b. 暑苦しさ 重苦しさ 狭苦しさ うす暗さ 甘酸っぱさ 悪賢さ

c. ＊僕の下宿は暑、弟の下宿は狭苦しいので、どちらもどっちだ。

AA 型複合形容詞も NA 型複合形容詞と同じ振る舞いをすることから、これらは語彙的複合形容詞であるといえる。

日本語特有の形容動詞は、多くの点で名詞と共通の特性を示すので（由本（1990：358-359））、NaA 型複合形容詞は NA 型複合形容詞と同等に扱い、語彙部門での形成とみなす。PA 型複合形容詞も C_1 を強意の接頭辞に近い名詞と分類し、NA 型複合形容詞の下位類とみなされる。従って、我々が分析の対象とした複合形容詞のうち、NA 型、AA 型、NaA 型、および PA 型複合形容詞は全て語彙部門での形成によってうまれた複合語である。

VA 型複合形容詞は、Kageyama（1989, 1993）の VV 型複合動詞の判別法を適用することによって、語彙的か統語的か判断できる。Kageyama による語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別は次のようなものである。

(13) 語彙的複合動詞：飛び上がる、飲み歩く、泣き叫ぶ、受け継ぐ、聞き返す、こびり付く、誉め讃える、等

統語的複合動詞：書き始める、食べ終える、話し続ける、動き出す、助け合う、言い忘れる、食べそこねる、等

V_1 - V_2 の結合において V_1 に、統語部門での操作である尊敬語化、代用形使用、受け身化、VN-*suru* 形が当てはまれば、その複合動詞は統語的に編入されたものとみなされる。そして確かに (13) の 2 種の複合動詞の区分が正しいことが実証される。

(14) 語彙的： *お飲みになり歩く、 *そうし開ける、 *言われ返す、
*投入し込む

統語的： お飲みになり始める、 そうし終える、 言われ続ける、
協力し合う

それでは、そのテストを我々が分析したいと考える VA 型複合形容詞に適用してみよう。

(15) a. * [お粘り] 強い * そうし強い。
 * 粘られ強い * 粘着し強い

b. {お聞き／お読み／ごらん} になり辛い

最近先生は疲れ易くなって、長い論文はなかなかお読みになり辛いようだ。

そうし辛い

{拝見／拝読／拝聴／発言} し辛い

- c. {*お慎み／*お疑り／*おなじみ／*お親しみ} になり深い

{*慎まれ／*疑われ／*なじまれ／*親しまれ} 深い

{*謹慎／*疑問視} し深い

- d. *お待ちになり遠しい *そうし遠しい

*待たれ遠しい *待機し遠しい

- e. {*お聞き／*お読み／*ご覧／*お眠り} になり苦しい

*そうし苦しい

{*聞かれ／*読まれ／*見られ／*眠られ} 苦しい

{*拝聴／*拝読／*拝見／*睡眠} し苦しい

- f. {*お焦げ／*お照れ} になり臭い

*そうし臭い

{*焦がれ／*照られ} 臭い

*熱射し臭い

- g. *お手っとりになり早い *そうし早い。

*手っ取られ早い *取得し早い

- h. {*お憎み／*お好き} になりたらしい

*そうしたらい

{*憎まれ／*好かれ} たらしい

*憎悪したらしい

- i. お聞き／お読み／ご覧／お食べになりたい

そうしたい

{聞かれ／読まれ／見られ／食べられ} たい

{拝聴し／読書し／見学し／食事し} たい

以上のような観察から、VA 型複合形容詞の中では、統語的に編入されたと判

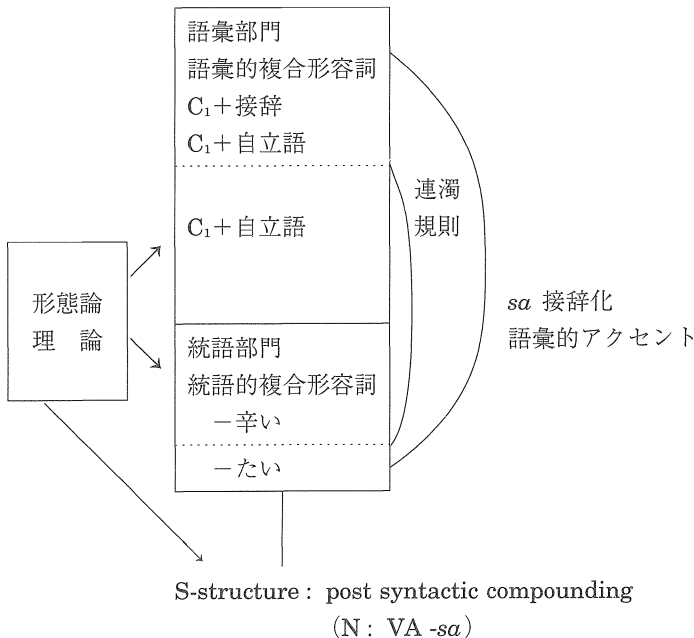
断されるのは、「-たい」と「-辛い」であり、それ以外は語彙的に複合されたものと判断される。

複合動詞において、使役の接辞（「-さす、-させる」）に連濁が起こらないのと同様、複合形容詞においても、 C_2 が自立性の無い接尾辞の場合には連濁は起こっていない。（「-はゆい、-こましい、-たらしい、-こい」）⁽⁶⁾それ故、連濁は自立語に操作される規則である。

音韻部門で起こるとされている、複合動詞の「食べそこねる、食べかける」等や、複合形容動詞の「日本：固有、全国：共通」等には連濁が起こらないように、複合形容詞においても post-syntax の部門には連濁は起こらない。（cf. 「車：買ったさ」）

以上の考察に基づくと、連濁規則の適用範囲は次のように表されるであろう。

(16)



ところが2節で実態を観察したように、語彙的複合形容詞の全てに連濁が起こるのではない。なぜある特定の C_2 には連濁が起こらないのか、さらに同じ C_2 でも、ある特定の C_1 との結びつきにおいては、なぜ連濁が起こらないのか、その点を解明するために、先行研究で明らかになった連濁阻止規則を検討していこう。

5. 連濁阻止規則

先行研究で明らかにされてきた、連濁を阻止する、もしくは起こしにくくする要因の中で、複合形容詞に適用できると思われるものは、次のようにまとめられる。

音韻的規則

① C_2 に有声阻害音が含まれる時：

‘Lyman’s law’の第1の項目として挙げられた点である。この法則はドイツ人ライマンによって提唱された、連濁に関する最も古くかつ重要な法則である。その後、小倉（1910）、金田一（1976）等でその詳細がまとめられている。

(17) りょうり+はさみ→りょうりばさみ え+はがき→えはがき
 *えばがき おり+かみ→おりがみ 合い+かぎ→合いかぎ
 *合いがぎ

この法則は非常に一般性が高く、例外は「縄ばしご」「ふんじばる」「練ざぶろう」（人名）等数例が見いだされている程度である。複合形容詞に対しても例外なく適用され、 C_2 が有声阻害音を含むと連濁は起こっていない。（厳しい、さびしい、ひどい、恥かしい、さがない、騒がしい、凄い、くどい）

② 連濁によって、同種、もしくは類字音が連続する時：

佐藤（1983, 1989）の指摘による。

(18) きずづける *きずづける（cf. 位置づける、名づける）

飛びひ *飛びび（cf. 焚きび、残りび）

同種、もしくは類字音というのを、幅広く有声阻害音の連続と解釈すれば、 C_1 が有声阻害音で終わる時に連濁が起こらない理由が説明される。(程とおい、程ちかい、意地きたない)しかし例外も多くあくまで傾向にすぎない。(枕毛、告げ口、むずがゆい、忍びがたい)

形態的規則⁽⁷⁾

③ C_1 が形容詞の時：

佐藤(1983, 1989)の指摘による。

(19) 甘くち、辛くち、早くち (cf. 裏ぐち、告げぐち、おちょぼぐち)

暑くるしい、重くるしい、狭くるしい (cf. 息ぐるしい、胸ぐるしい)

(C) グループの「苦しい」には、この規則が適用される。NA 型、VA 型、PA 型では連濁が起こるのに対し、AA 型では連濁が起こっていないので、 C_1 の範疇が連濁生起を決定していると思われる。

(20)	連濁あり	連濁なし
苦しい	息－，胸－，目間－，耳－， 心－ (NA 型) 寝－，聞き－，見－ 等 生産的 (VA 型)	むさ－，堅－，狭－， 重－，暑(熱)－ (AA 型)
怠(たる)い	気(け)－，間－ (NA 型)	舌－ (NA 型) あまっ－ (AA 型) かっ－ (PA 型)

しかし、これはあくまで (C) グループの AA 型複合形容詞にのみ適用されるのであって、(A, B) グループの AA 型複合形容詞には適用されない。(A, B) グループの AA 型複合形容詞に連濁を起こす例が多い理由については、次項で述べる。

統語的規則

④ C_1 と C_2 が格関係にある時：

C_1 が C_2 の主格、もしくは目的格に当たる場合、連濁は阻止される。

(21) O+V 関係

稲かり，草かり (cf. 五分がり，虎がり)

缶きり, 糸きり歯 (cf. 線ぎり, 輪ぎり)

S+V 関係

雨ふり, 雪ふり (本ぶり, 土砂ぶり)

複合形容詞では, C₁ が C₂ の主語にあたる以下のものに適用できる。

(22) 末頼もしい, 筋骨たくましい, 口広い, 幅広い, きめ細かい, こと細かい

逆に C₁ と C₂ が副詞的修飾語と動詞の関係にあると, 連濁が起こりやすい。この規則はかなり有力であり, この規則を適用すると, 「(血) 生ぐさい」の例外的な振る舞い, および (A, B) グループの AA 型が説明される。以下でこの 2 点について分析する。

「一臭い」は連濁が起こらない形容詞であるが, 唯一の例外が「(血) 生ぐさい」である。これは, C₁ の「生」に連濁を起こす何らかの要因があると思われる。

「生」の分析を行う前に「一臭い」複合形容詞をさらに細分化してみよう。『広辞苑』によると, 接尾辞的な「一臭い」には次の 3 つの意味がある。i) …のにおいがする。ii) …のように感じられる。…らしい。iii) いやになる程…だ。すると「一臭い」複合形容詞は, 意味的に次のように細分化される。

i) こげくさい (VA 型)

白粉くさい, 抹香くさい, 紙子くさい, 汗くさい, 味噌くさい, ぬかみそくさい, 乳くさい, 土くさい, 金くさい, カビくさい, 泥くさい, 血くさい, 酒くさい, (血) 生ぐさい (NA 型)

ii) 田舎くさい, 仙人くさい, 爺くさい, 仏くさい, 男くさい, 坊主くさい, 水くさい, バタくさい, 分別くさい, 素人くさい, 人くさい, 小便くさい, 日向くさい, 洒落くさい, 自慢くさい (NA 型)

iii) てれくさい (VA 型)

古くさい, とろくさい (AA 型)

(七) 面倒くさい, 馬鹿くさい, 半可くさい, 陰気くさい, 心気くさ

い, 野暮くさい, 鈍くさい, 邪魔くさい, うさんくさい (NaA 型)

同一の「一臭い」ではあるが, 「生臭い」の「一臭い」は i) の意味で使われているので, 問題を i) の意味の「一臭い」に絞って考えていくことにしよう。

「生」が持つ連濁生起の要因の第 1 として, 語末の「マ音」が挙げられる。事実, 「連濁というものはその直前に鼻音があった場合に起こりやすかった」(金田一 (1976: 3)) と考えられているからである⁽⁸⁾。C₁ の中で語末に鼻音を持つ他の形態は「金」であるが, こちらは連濁を起こしていない。それでは, 「生」と「金」を区別する別の要因は何だろうか。それは C₁ と C₂ との意味的な結合関係が影響している。すなわち「生」以外の名詞はそこに, S+V 関係が成り立ち, 「生」の場合は副詞的修飾語と述語との関係が成り立つのである。

- (23) a. 乳くさい = 乳 ga くさい
 b. 土くさい = 土 ga くさい
 c. 生ぐさい = 生 de くさい (cf. *生 ga くさい)

金田一 (1976: 13-15) に数多く例証されているように, C₁ と C₂ が副詞的修飾語と動詞の関係にある時は連濁が起こる。それはその結びつきが, 主格あるいは目的格と動詞との結びつきに比べより親密であるためである。「生ぐさい」に関しても, その親密度を表す指標として連濁が生じているのであろう。

次に (A, B) グループの AA 型複合形容詞の分析に移ろう。この型の複合形容詞には連濁が起こる。(甘ずっぱい, 悪がしこい, 悪がたい, ずるがしこい, うすぐらい, うすぐろい, うすじろい, 浅ぐろい, 青じろい) 一見したところこれらは, C₁ と C₂ が, 意味的に相反する形容詞であり, 並列構造を成すかのように思われる。

- (24) a. 甘ずっぱい=甘い⇔すっぱい
 b. 悪がしこい=悪い⇔かしこい (「悪がたい」も同様)
 c. ずるがしこい=ずるい⇔かしこい
 d. うすぐらい=うすい⇔くらい (「うすぐろい」も同様)
 e. 青じろい=青い⇔しろい

並列構造を成す複合語は連濁を起こさないことは、先行研究で明らかにされており、例外もない。

- (25) すききらい (cf. たべずぎらい) おひれ(尾と鱭) ⇔ おびれ(尾の鱭)
 飲みくい (cf. やけぐい) 山かわ(山と川) ⇔ 山がわ(山の川)
 笛たいこ (cf. 小だいこ) 行きかえり (cf. 里がえり)

したがって、仮に(24)の複合形容詞が並列構造を成すなら、むしろ連濁が阻止されるはずである。ところが(24)と(25)のグループには、アクセントのまとまりの点で大きな違いがある。すなわち並列構造を成す複合語は、各構成素のアクセントが保持され、1つにまとまらない。

- (26) すききらい, おひれ, のみくい, やまかわ,
 ふえたいこ, いきかえり

これに対し、(24)のグループはアクセントが1つにまとまる。

- (27) あまずっぱい, わるがしこい, ずるがしこい, うすぐらい,
 あおじろい

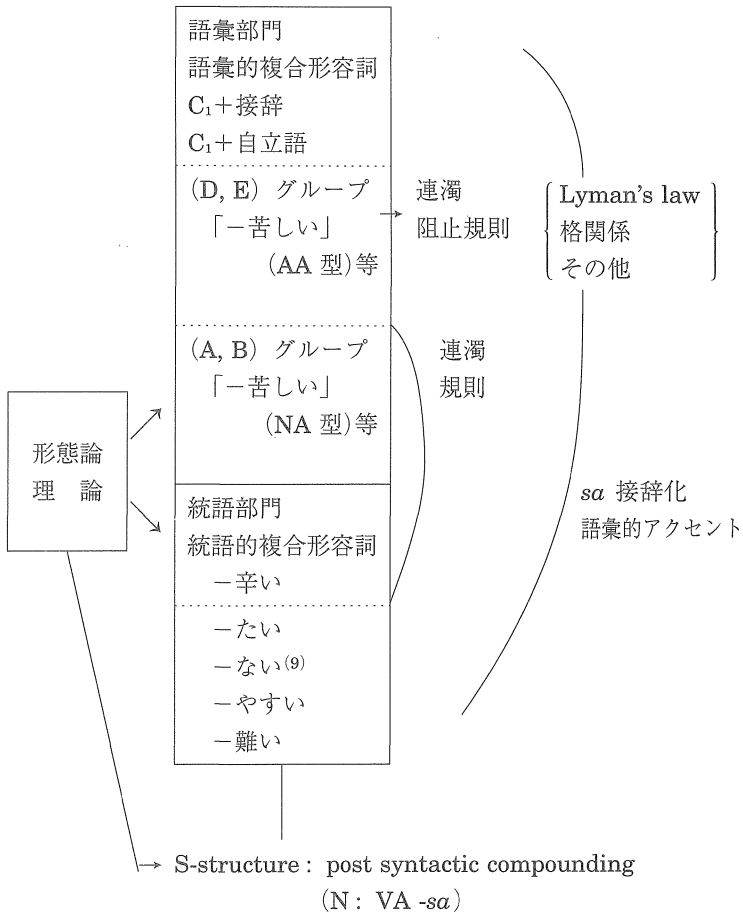
これらは C_1 と C_2 が並列的に結ばれているのではなく、 C_1 が C_2 を意味的に規定している。

- (28) a. 甘ずっぱい = 甘みのあるすっぱさ
 b. 悪がしこい = 悪い面でのかしこさ
 c. ずるがしこい = ずるい面でのかしこさ
 d. うすぐらい = うすいくらさ
 e. 青じろい = 青みのあるしろさ

このように、 C_1 の形容詞は C_2 の形容詞の副詞的修飾語であるので、 C_1 と C_2 の結合度が強く連濁を起こしているのである。

複合形容詞の連濁生起のメカニズムは、(16)に基づき次のように体系化されるであろう。

(29)



6. おわりに

本稿では複合形容詞の連濁生起分布を観察し、連濁は語彙的、統語的複合形容詞のうち、 C_2 が自立語のものに操作される可能性を持つ音韻規則であると結論づけた。その場合、ある条件のもとでは連濁が阻止されるのであるが、その要因

は音韻, 統語, 形態, 意味といった要素が複合的に関与している。その中で有力なものは, 音韻規則の Lyman's law と統語規則の C_1C_2 の格関係と思われる。しかしそれ以外の細かい規則を考慮しても, なぜ連濁が起こらないのか説明できない複合形容詞も存在する。日本語の複合形容詞は事例が少なく, 複合名詞ほど生産性も高くないので, 筆者の分析がどこまで一般性の高いものであるのか, 複合形容動詞や複合動詞にも分析の範囲をひろげ, 本稿で提唱した連濁生起のメカニズムをさらに確信的なものにすることが, 今後の課題である。

注

(1) この分類は佐藤(1983)にならった。

(2) 範疇記号は以下のように規定する。

N:名詞 V:動詞 A:形容詞 Na:形容動詞

P:接頭辞(小-, か-, 御-, 真-, どす-, 素-)

「むず-, すべ-, ほの-, ねち-, ねば-」のように量語化して擬態語として用いられる形態素は N と分類した。

*は各グループにおける例外を示す。

(3) 関西以西方言では, 「肌ざむい」と連濁を起こす。(筆者の調査した 45 人中 43 人までが「肌ざむい」と回答。)

(4) 由本(1990)に従い「筋骨たくましい」を複合形容詞とみなした。由本(1990: 367)には, 「筋骨たくましい」が対応する句構造と異なり, アクセントのまとまりを示すと記述されているが, (cf. 筋骨がたくましい／筋骨たくましい) この点には筆者は異議を唱えたい。 C_2 が 5 モーラ以上だと C_1 と C_2 の間に若干のポーズが置かれ, 完全に語アクセントにはまとまりきれないように思われる。(cf. 見目: 美しい)

(5) 動詞+動詞の複合動詞には, 連濁が起こらない。Lyman's law の第 3 項目として挙げられ, 金田一(1976), 佐藤(1989)等にまとめられている。

例) かみきる, 押しとおす, 立てかける, 言いはなつ, 跳びこむ

(6) 唯一の例外は「目(ま)ばゆい」である。これは C_1 に「め→ま」という母音変化が起こり, C_1 と C_2 の結びつきをより緊密にし, 複合語というより自立語としての性格をうち出している。語としてのまとまりに矛盾をきたさないため連濁も起こったものと思われる。(cf. 気(け)だかい, 気(け)だるい, 木(こ)深い)

(7) 連濁を阻止する形態的規則の中で真っ先に上げられるのは, 「第 2 要素が漢語, 外来語である時」というものであろう。これは 'Lyman's law' の第 2 項目とし

て挙げられ、連濁に関する先行研究には、必ず記述されている規則である。

例) 和語：しなの+かわ→しなのがわ 漢語：びわ+こ→びわこ *びわご

外来語：とうきょう+タワー→とうきょうタワー *とうきょうダワー

例外として、漢語、外来語で連濁を起こす語は、和語化していると思われる程、なじみのある語である。

例) 歌ガルタ、くわえギセル、赤ゲット (中川 (1966)) 株式がいしゃ、

黒ざとう、寒げいこ (佐藤 (1989))

しかし複合形容詞に関しては、C₂が漢語、もしくは外来語の例が見出せないで、この規則は特に重要であるとは思われない。

- (8) 前の鼻音が連濁生起に及ぼす影響を架空の複合語 (一臭い) によって実験したところ、次のような結果がでた。(45 人の被験者に連濁する／しないのどちらが自然が回答してもらった。)

「米ぐさい」を自然だと答えた人が 1/3 近くに上るのは、興味深いことである。語末鼻音に加え、2 モーラという長さが影響しているのかもしれないが、推測の域をでない。

	ーくさい	ーぐさい
さんま	37	8
しみ	44	1
ガソリン	43	2
すもも	35	10
米	31	14
つけもの	36	9

- (9) 「つまらない、くだらない、よるべない、争そえない、そぐわない」等意味の慣習化の見られる一部の「ない」型を除く。

主要参考文献

- 平野尊識 1974. 「連濁の規則性と起源」『文学研究』71, 21-43, 九州大学.
 Kageyama, T. 1989. "The place of morphology in the grammar. Verb-Verb compounds in Japanese," *Yearbook of Morphology* 2, 73-94.
 影山太郎 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
 Kageyama, T. to appear. "Word Formation," *The Handbook of Japanese Linguistics*. ed. by Natsuko Tsujimura. Basil Blackwell.
 金田一春彦 1976. 「連濁の解」*Sophia Linguistica* 2, 1-22.
 Otsu, Y. 1980. "Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems," *Theoretical Issues in Japanese Linguistics* (MIT Working Papers in Linguistics

2), 207-227.

佐藤大和 1983. 「連濁の分析と規則化の検討」『日本音声学会講演論文集』1-2-10, 61-62.

佐藤大和 1989. 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子 編『日本語の音声・音韻（上）』（講座 日本語と日本語教育 第2巻）明治書院, 233-265.

由本陽子 1990. 「日英対照複合形容詞の構造」『言語文化研究』16, 353-370. 大阪大学.

——大学院文学研究科博士課程後期課程——